

旨い酒と肴

昔からお酒は『百薬の長』と言われ、適量のお酒はどんな良薬よりも良いと言われてきました。そんなお酒にまつわる悲喜こもごもや、お酒に合うおつまみなどの本を紹介します。



歴史の裏に「酒」あり

●『酒が語る日本史』和歌森 太郎／著 河出書房新社

皆さんは明智光秀が下戸だったということを知っていますか？ある晩、信長が家来たちと大酒を飲んでいたところ、光秀が酔いを醒ますため座をはずしたことに信長が激怒し、槍を突き付けられたり、また別の日には信長から「刃を呑むか、酒を飲むか」と迫られたなど、信長の家臣として秀吉と双璧をなす名将光秀もお酒には苦労したようです。

この本では、相当の酒豪とされている者が実はそうでなかったり、逆に意外な人物が酒豪だったりと、驚かされます。読めば読むほどついニヤニヤしてしまうことまちがいなし。

つい飲みに行きたくなる

●『吉田類の酒場放浪記』 TBS サービス

「大人がひとりでぶらっと立ち寄れる」でおなじみの酒場紀行番組を書籍化したもので、吉田類さんの穏やかさや、お店、お客さんに対する愛情が垣間見られる一冊です。

お店の看板メニュー、営業時間、定休日、アクセス方法などの情報だけでなく、吉田類さんの描くほのぼののイラストや俳句なども楽しめます。一軒一軒訪ねてみてはいかがですか？シリーズで1杯目から9杯目まで出版されています。

心の酒場

●「酒の肴、おいしい愉しみ」根本 きこ／著 集英社

「お酒は心の潤滑油で、還暦を迎えたら、自分のお店のカウンターの端でお酒をちびちびやっていたい」と言う無類のお酒好きの著者は、おいしいお酒を求めて酒造めぐりや酒器選びにも余念がありません。

また、著者のお店で老婆ちゃん、お母さんと続いてきたきんぴらや、お酒に合う肴のレシピなども紹介しています。

早く家に帰って一杯やりたくなりますよ。

